

『新後撰和歌集』の「詞書」の語彙  
—いくつかの特徴的使用語の使用実態について—

若 林 俊 英\*

The Vocabulary of Kotobagaki in *Shin-gosenwakashu*:  
Characteristic Trends in Language Use

WAKABAYASHI Toshihide\*

This paper is on some characteristic trends in the vocabulary used in the Kotobagaki of *Shin-gosenwakashu*, comparing it mainly with the language used in the Kotobagaki of the six other imperial-commissioned poem anthologies: *Senzaiwakashu*, *Shin-kokinwakashu*, *Shin-chokusenwakashu*, *Shoku-gosenwakashu*, *Shoku-kokinwakashu*, and *Syoku-shuiwakashu*.

This time, the following six words have been picked for consideration and analysis:

—“Wasuru”, “Kouan”, “Wakana”, and “Shiyakukiyo”—4 of the 19 words which are *fundamental words*, (words which have more than one per mil usage rate in a whole book), used frequently in *Shin-gosenwakashu*, but aren't commonly used in the other six anthologies noted above.

—“Miyuki” and “Neburi”—two words that appear, but are not considered fundamental words in *Shin-gosenwakashu*, and of which there are no examples of usage in the other six anthologies noted above.

My considered opinions are as follows:

1. Frequent use of the word “Wasuru” could be linked to the waka poem theme, “Wasururukoi”
2. The reason “Kouan” and “Shiyakukiyo” are frequently used could be to fit with the editor Tamayo's editorial concept.
3. “Wakana” and “Miyuki” could be words which are characteristic to the Nijyo sect.
4. Although the word “Neburi” can be found in other anthologies of waka poems, it is used only once in *Shin-gosenwakashu*, and is completely absent from all other anthologies collected by Imperial command, making it a word of particular interest.

---

\* 城西大学教授

一

本稿は、第一三代の勅撰集である『新後撰和歌集』の詞書・左注（以下、「新後撰詞書」と略称する<sup>1</sup>）の自立語語彙の使用実態についていささかまとめたものである。「新後撰詞書」の自立語語彙の総体的性格と、いくつかの使用語の特徴については前稿<sup>2</sup>でもふれた。本稿では、前稿でふれ得なかつた特徴的使用語の使用実態についてふれることにする。

周知のように『新後撰和歌集』は、後宇多院の院宣により二条為世が撰進し、

対立のきびしい大覚寺・持明院の両皇統、抗争にはげしさの加わつた二条・京極・冷泉の三家、そのさなかに撰集せられた本集は、おのずから庇護者の大覚寺統ならびに二条派歌人を重くした<sup>3</sup>

とされるものである。このような点を考慮し、本稿では主として、いわゆる二条家三代集以降の勅撰集である『千載和歌集』から『統拾遺和歌集』までの詞書・左注（以下、「詞書」と略称する）の自立語語彙と比較することにより、「新後撰詞書」の自立語語彙の性格の一端をみることにする。

語彙調査を行なうに当たつての単位語の取り方については、筆者の同様の調査<sup>4</sup>との関係で、宮島達夫氏編『古典対照語い表』（昭和四六年九月、笠間書院）における認定基準

に、おおむね依拠した。また、本文は、『新編国歌大観 第一卷』（昭和五八年二月、角川書店）所収本（底本は、宮内庁書陵部蔵二十一代集（五一〇・一三）中の吉田兼右書写本）によつた。

二

ある作品の語彙の特徴についてふれる場合、異なり語数・延べ語数、品詞別・語種別構成比率等の観点から、まず大きく捉えるのが一般的である。ただ、これらについては、すでに前稿でふれているので、本稿では、水谷静夫氏が示された類似度<sup>5</sup>Dを使用し、「新後撰詞書」の語彙について考えることにする。

表（1）は、「新後撰詞書」の語彙と、「千載詞書」から『統拾遺詞書』までのそれらとの類似度Dをまとめたものである。

筆者は、「千載詞書」以前の「詞書」相互間の類似度Dの値についても調査したことがあるが、それと比較した場合、この表（1）での値が高いことがわかる。また、当然といえどば当然のことではあるが、一般的に隣接する「詞書」間の類似度Dの値が高くなるという原則は、この表（1）においてもみてとれる。なお、この表からは、

表 (1)

	千 載	新古今	新勅撰	続後撰	続古今	続拾遺
新後撰	0.819	0.819	0.828	0.868	0.877	0.906
続拾遺	0.826	0.839	0.837	0.876	0.888	
続古今	0.837	0.854	0.850	0.877		
続後撰	0.829	0.853	0.857			
新勅撰	0.829	0.851				
新古今	0.861					

1 「新古今詞書」と「新勅撰詞書」との類似度 $D'$ の値は、上記原則の例外となっている

2 「新勅撰詞書」と「続後撰詞書」以降の「詞書」との間の類似度 $D'$ の値は、相対的に低い

3 「続後撰詞書」以降の「詞書」相互間の類似度 $D'$ の値は〇・八六以上と、非常に高い。

中でも「続拾遺詞書」と「新後撰詞書」とのそれは、注目に値する高さとなっているような点もみてとれよう。

1 に関しては、自らが撰者の一人として加わった『新古今和歌集』を否定的にとらえるまで変化した『新勅撰和歌集』編纂時の定家の心境が、「新古今詞書」の使用語彙と「新勅撰

詞書」のそれとを微妙に相違させた結果であると考えられる。

2 に関しては、1とも関係するが、『新勅撰和歌集』編纂時の定家の思考の変化が『続後撰和歌集』の撰者である為家にとつては違和感を持つものであり、それが「詞書」にも影響を与えたと考えられる。そして、為家の定家に対する違和感が、それ以後の二条家の人々にも受け継がれた結果であると思われる。

3 に関しては、1、2とも関係するが、いわゆる二条家三代集、特に為家単独撰である『続後撰和歌集』の影響は、二条家の人々にとつては非常に大きなものがあり、それが結果的に「続後撰詞書」以降の勅撰集の「詞書」相互の類似度を高めたと考えられる。なお、「続拾遺詞書」と「新後撰詞書」との類似度 $D'$ の高さは、「おおむね伝統墨守の平板な詠を撰び、撰歌対象年代の幅の狭さとも相まって迫力や新鮮味に欠ける」といわれる『新後撰和歌集』の詠風とも関係があると思われる。すなわち、『新後撰和歌集』が二条家三代集的な枠からの逸脱を極度に抑えた平板で新鮮味のない詠風であるからこそ、「新後撰詞書」の語彙と「続拾遺詞書」のそれとの類似度 $D'$ は注目に値するものとなったと思われる。

次に、「新後撰詞書」における特徴的な使用語についてふ  
 りたい。

ある「詞書」における特徴的使用語を抽出する方法は、さ  
 まざま考えられるであろう。筆者も累積使用率による段階分  
 けによって抽出したことがあるが、本稿では、「新後撰詞  
 書」の基幹語で、かつ「千載詞書」から「統拾遺詞書」まで  
 では非基幹語であるものをもって「新後撰詞書」の特徴的使  
 用語とする。なお、本稿では、各「詞書」における延べ語数  
 の一パーミル以上の使用度数をもつものを基幹語とした。

上記のようなものを基幹語とすると、「新後撰詞書」の基  
 幹語彙は、前稿でも述べたように、異なり語数で一六一、延  
 べ語数で四三九八となる。うち、ここで対象となるものは、  
 しゃうじよほふしんわう（性助法親王）・わする（忘）・  
 こうあん（弘安、年号名）・ろくひやくばん（六百番）・  
 たひら（平、姓）・ころも（衣）・ちどり（千鳥）・ふぢ  
 はら（藤原、姓）・ためうち（為氏、人名）・わかかな（若  
 菜）・くわいきう（懐旧）・ごさがるん（後嵯峨院）・し  
 ちねん（七年）・あと（跡・後）・さみだれ（五月雨）・  
 しゃくけう（釈教）・うぐひす（鶯）・たうい（搦衣）・  
 ためいへ（為家）

の一九語であるが、前稿では、すでに「ろくひやくばん（六  
 百番）」および「たうい（搦衣）」の二語についてふれている  
 ので、本稿では、「わする」「こうあん」「わかかな」「しゃくけ  
 う」について、その使用実態をみることにする。

## 2

まず、「わする（忘、下二段）」についてふれたい。

表（2）は、「千載詞書」から「新後撰詞書」までの「わ  
 する」の使用度数を示したものである。<sup>①</sup>以下、具体的に使用  
 実態をみることにする。

「千載詞書」には、

例1 服に侍りける時、或る上人の来れりけるが、墨染の  
 袈裟を忘れて取りに遣したりける、遣すとて詠める  
 （五八〇）

のような使用例が、また、「統後撰詞書」には、

例2 わするる草のたねをだに、といひける人の返事に  
 （九八二）

のような使用例がある。これらに対して「統古今詞書」に  
 は、

例3 忘恋のこころを（一三〇八）

例4 寄鏡忘恋といへることを（一三三四）

表(2)

	千載	新古今	新勅撰	続後撰	続古今	続拾遺	新後撰
わする	3	0	0	2	2	0	6

のような歌題での使用例がみられる。また、「新後撰詞書」での六例はすべて、

例5 百首歌たてまつりし時、忘恋(一〇

六一)

のような「忘恋」という歌題で使用されている。

以上からわかるように、「新後撰詞書」における「わする」の頻用は、「忘恋」という歌題の頻用の結果によるものである。この「忘恋」は、上掲したように「続古今詞書」にもあるが、頻用されるのは「新後撰詞書」あたりからである。また、「忘恋」は、『新後撰和歌集』に続く『玉葉和歌集』『続千載和歌集』『続後拾遺和歌集』『風雅和歌集』『新千載和歌集』『新拾遺和歌集』『新後拾遺和歌集』『新続古今和歌集』の「詞書」においても、一例、四例、二例、一例、二例、一例、三例、一例のように使用され、歌題として定着したものであることがわかる。なお、この「忘恋」が二条派好みの歌題かどうかについては軽々には論じられない。ただ、非二条派の勅撰集である『玉葉和歌集』『風雅和歌

集』の「詞書」における使用度数が前後の勅撰集の「詞書」に比較して少ないことも、それを考える上での手がかりになるかもしれないが、この点については今後の課題としてい。

### 3

次に、「こうあん(弘安)」についてふれたい。

表(3)は、「続後撰詞書」から「新続古今詞書」までの「こうあん」の使用度数を示したものである。以下、具体的に使用実態をみることにする。

「続拾遺詞書」には、

例6 弘安元年十月、春日社にはじめて御幸ありし時まる

りて…(一四三二)

という使用例がある。

「新後撰詞書」には四八例あるが、うち三六例が、

例7 弘安元年、百首歌たてまつりし時(三二)

という使用例であり、

例8 弘安元年、百首歌めされしついでに(四九三)

のような使用例と合わせ、計四一例が「弘安元年百首歌」という形で使用されている。<sup>14)</sup>

「続千載詞書」には五七例あるが、うち四二例が、

表(3)

	統後撰	統古今	統拾遺	新後撰	玉葉	統千載	統後拾	風雅	新千載	新拾遺	新後拾	新統古
こうあん	0	0	1	48	0	57	16	1	22	19	24	52

- 例9 弘安百首歌たてまつりける時(三二)  
 (一) という使用例であり、  
 例10 弘安百首歌奉りし時(二〇〇八)  
 例11 弘安百首歌めされし次に(一一六六)  
 (六) のような使用例を合わせ、計五〇例が「弘安百首歌」という形で使用されている。<sup>15)</sup>  
 「統後拾遺詞書」には一六例あるが、うち一〇例が、  
 例12 弘安百首歌奉りけるととき(三二〇)  
 という使用例であり、  
 例13 弘安百首歌めしける次に(八四二)  
 (二) 例14 弘安百首歌たてまつりし時(一一六七)  
 のような使用例を合わせ、計一三例が「弘安百首歌」という形で使用されている。<sup>16)</sup>  
 「風雅詞書」には、  
 例15 弘安百首歌たてまつりける時(三七三)  
 (七三) という使用例がある。  
 「新千載詞書」には二二例あるが、うち六例が、  
 例16 弘安百首歌たてまつりける時(一一九〇)  
 という使用例であり、  
 例17 弘安百首歌めされける次に(五八七七)  
 を合わせ、計七例が「弘安百首歌」という形で使用されている。また、  
 例18 弘安元年百首歌奉りける時(五一〇〇)  
 という使用例も二例ある。<sup>17)</sup>  
 「新拾遺詞書」には一九例あるが、うち三例が、  
 例19 弘安百首歌たてまつりける時(三八七三)  
 という使用例であり、  
 例20 弘安百首歌たてまつりし時(一七九三三)  
 を合わせ、計四例が「弘安百首歌」という形で使用されている。また、八例の、  
 例21 弘安元年百首歌奉りける時(一〇六六)  
 という使用例に、  
 例22 弘安元年百首歌めしける次に(二四〇二)  
 例23 弘安元年百首歌たてまつりけるに(一七八〇)  
 を合わせ、計一〇例が「弘安元年百首歌」という形で使用されている。<sup>18)</sup>  
 「新後拾遺詞書」には二四例あるが、うち一二例が、

表(4)

	統拾遺	新後撰	玉葉	続千載	続後拾	風雅	新千載	新拾遺	新後拾	新統古
弘安元年百首歌	0	41	0	1	0	0	2	10	7	12
弘安元年	1	1	0	1	1	0	3	1	2	2
弘安百首歌	0	0	0	50	13	1	7	4	15	35
その他	0	6	0	5	2	0	10	4	0	3

(注)「新統古」の「弘安百首歌」には「弘安百首の歌」も含む。

- 例24 弘安百首歌に(三六九) という使用例であり、
- 例25 弘安百首歌たてまつりける時(一四九) を合わせ、計一五例が「弘安百首歌」という形で使用されている。また、五例の、
- 例26 弘安元年百首歌たてまつりける時(二九四) という使用例に、
- 例27 弘安元年百首歌めさける次に(一七) を合わせ、計七例が「弘安元年百首歌」という形で使用されている。<sup>19)</sup>
- 「新統古今詞書」には五二例あるが、うち二四例が、
- 例29 弘安百首歌に(四三九)
- 例28 弘安元年百首歌に(二二四二)
- 例30 弘安百首の歌に(一九四〇) という使用例であり、
- 例31 弘安百首歌の中に(七三五)
- 例32 弘安百首歌たてまつりける時(一〇六)
- 例33 弘安百首歌めさけるついでに(一八二八) のような使用例を合わせ、計三五例が「弘安百首(の)歌」という形で使用されている。また、六例の
- 例34 弘安元年百首歌に(二三五) という使用例に、
- 例35 弘安元年百首歌たてまつりける時(四一)
- 例36 弘安元年百首歌めさける次に(四三〇)
- 例37 弘安元年百首歌の中に(一三一六) のような使用例を合わせ、計一二例が「弘安元年百首歌」という形で使用されている。<sup>20)</sup>
- 以上のような「こうあん」の使用実態をまとめると、表(4)のようになる。この表からは、「新後撰詞書」と「新拾遺詞書」では「弘安元年百首歌」が優勢であり、特に「新後撰詞書」においては、その傾向が顕著であることがわかる。また、
- 1 「新後撰詞書」における「こうあん」の類用は、撰歌資料として「弘安百首」を重視した結果である。なお、「弘安百首」を重視したのは、父為氏が撰進した『統拾



遺和歌集』の撰歌資料として龜山院が召されたものであるからであろう

2 非二条系の「玉葉詞書」「風雅詞書」において、「こうあん」の使用例がほとんどない。これは、1に述べたような「弘安百首」の詠進理由が関係していると考えられる

3 「続千載詞書」における「こうあん」の頻用の理由は、1と同様であろう

4 「新後撰詞書」においては、編纂の徹底化が図られた結果、「弘安元年百首歌」としている。一方、同じ為世が撰者である「続千載詞書」においては、「弘安百首歌」にほぼ統一している

のような点も指摘できるであろう。なお、4に関しては、その理由は、必ずしも明確ではない。ただ、以下に述べるような点が、その理由の一端となっているのかもしれない。

表(5)は、勅撰集の撰集資料として召された「宝治百首」をはじめとする四つの応制百首に関して、「新後撰詞書」から「続千載詞書」までにおける元号を含む百首の表記の用例についてまとめたものである<sup>(2)</sup>。

『新後撰和歌集』撰進のための応制百首である「嘉元元年百首」に関して、「新後撰詞書」においては、多く、

例 38 百首歌たてまつりし時、…(三七)

表(5)

	宝治百首	弘長百首	弘安百首	嘉元百首
新後撰	宝治二年(…)百首歌 3	弘長元年百首歌 26	弘安元年百首歌 41	百首歌
	宝治百首歌 15	弘長元年(…)百首歌 1	—————	—————
玉 葉	宝治二年百首歌 9	弘長元年百首歌 2	—————	嘉元元年百首歌 3
	宝治百首歌 13	弘長百首歌 8	—————	嘉元元年(…)百首歌 1
	—————	—————	—————	嘉元百首歌 25
続千載	宝治二年百首歌 1	弘長元年百首歌 1	弘安元年百首歌 1	嘉元元年百首歌 1
	宝治百首歌 34	弘長元年(…)百首歌 1	弘安百首歌 50	嘉元百首歌 75
	—————	弘長百首歌 7	—————	嘉元百首 1

のようにしている。また、表(5)でわかるように、一代前の勅撰集である『続遺和歌集』に関する応制百首に関しては「弘安元年百首歌」、二代前のそれに関しては「弘長元年百首歌」のように、より正確な形で統一している。しかし、それ以前は「宝治百首歌」「宝治二年(…)百首歌」のように不統一であることもわかる。一方、「続千載詞書」においては、二条家系の一代前の勅撰集である『新後撰和歌集』の応制百首であ

る「嘉元百首」に関しては「嘉元百首歌」、二代前のそれは「弘安百首歌」、三代前のそれは「弘長百首歌」のように、「元号+百首歌」の形で一応の統一はなされている。と同時に、「嘉元元年百首歌」「弘安元年百首歌」「弘長元年百首歌」のような表記も散見し、細部における統一の徹底が図られているとは、必ずしも言えないこともわかる。

以上、前代、前々代に関してはより正確な出典名を記そうとした「新後撰詞書」と、「元号+百首歌」という形で統一しようとした「続千載詞書」との編纂姿勢の相違が、結果的に4のような相違となったのかもしれない。

4

次に、「わかかな(若菜)」についてふれたい。

表(6)は、「千載詞書」から「続後撰詞書」までの「わかかな」の使用度数を示したものである。また、この表にはないが、「わかかな」は「古今詞書」「拾遺詞書」「詞花詞書」においても各一例使用されており、『新後撰和歌集』に続く『玉葉和歌集』『続千載和歌集』『続後撰和歌集』『風雅和歌集』『新千載和歌集』『新拾遺和歌集』『新後撰和歌集』『新統古今和歌集』の「詞書」においても、三例、六例、四例、二例、八例、二例、二例、四例、それぞれ使用されている。

表(6)

	千載	新古今	新勅撰	続後撰	統古今	続拾遺	新後撰
わかかな	2	3	0	1	1	2	6

これからすると、「わかかな」は、広く使用された用語であるということになるが、勅撰集において本格的に歌題として一般化するの

例39 述懐百首歌よみ侍りけるに、若菜  
(一五)

例40 大神宮にたてまつりける百首歌の  
中に、わかかなをよめる(一六一〇)

のような使用例がみられる『新古今和歌集』以降であると言える。以下、「千載詞書」から「新後撰詞書」までの使用実態をみることにする。

「千載詞書」には、

例41 堀河院の御時、百首の歌奉りける  
内、若菜の歌とて詠める(一四)

のような使用例が、「新古今詞書」には、上掲した例39・例40以外に、

例42 亭子院の六十御賀屏風に、わか

つめるところをよみ侍りける(七一)

という使用例が、それぞれある。

「続後撰詞書」には、

表(7)

	千載	新古今	新勅撰	続後撰	続古今	続拾遺	新後撰
御子左・二条	0/1	2/2	0/0	1/1	1/1	0/2	3/6

例43 久安六年崇徳院に百首歌たてまつ

りける時、若菜をよみ侍りける(三)

(一)

という使用例が、「続古今詞書」には、

例44 若菜をよみ侍りける(二〇)

という使用例が、それぞれある。

「続拾遺詞書」には、

例45 若菜をよませ給うける(二二)

のような上掲したのと同様の「わかな」の使用例とともに、

例46 宝治二年後嵯峨院に百首歌たてまつりける時、沢若菜(二二)

という結び題としての使用例もある。<sup>22)</sup>

「新後撰詞書」にも、

例47 百首歌たてまつりし時、若菜(二

三)

のような使用例とともに、

例48 雪中若菜といへる心を(二四)

のような結び題としての使用例が、計四例ある。

表(7)は、歌題としての「わかな」の使用度数と、使用された「詞書」のある和歌の

詠者が御子左家・二条派に属すると思われる用例数を示したものである。

この表(7)で見ると、御子左家・二条派に属する歌人の和歌の「詞書」において「わかな」<sup>23)</sup>が使用される傾向にあることがわかる。この点、『新後撰和歌集』より後の勅撰集の「詞書」においても、比率は減少するものの同様の傾向はみられる。<sup>24)</sup>

以上、「わかな」の使用実態についていささかみてきたが、それからすると、「わかな」は中世的な歌題であり、特に、二条派の撰集に好まれたものであるとも言えそうである。この点、非二条派の撰集である『玉葉和歌集』『風雅和歌集』の「詞書」における使用度数が、他の勅撰集の「詞書」におけるそれと比較した場合、比較的少ないこともその傍証になろう。なお、「わかな」は、「続古今詞書」から「新続古今詞書」までに四〇例あり、うち一二例が結び題としての使用である。「新後撰詞書」には、先にみたように結び題として四例使用されているが、この結び題としての使用の多さも、「新後撰詞書」における「わかな」頻用の要因となっていると思われる。

表(8)

	千載	新古今	新勅撰	統後撰	統古今	統拾遺	新後撰
しやくけう	0	0	0	0	4	4	9

次に、「しやくけう(釈教)」についてふれる。

表(8)は、「千載詞書」から「新後撰詞書」までの「しやくけう」の使用度数<sup>26)</sup>を示したものである。以下、具体的に「しやくけう」の使用実態をみることにする。

「統古今詞書」には、

例49 釈教の心を(七八二)

のような使用例が、また、「統拾遺詞書」には、

例50 きさらぎのなかばのころ八十賀し

侍りけるついでに、釈教の心を(二三

六〇)

のような使用例が、それぞれ計四例ある。

「新後撰詞書」には、

例51 釈教の心を(六三一)

例52 百首歌奉りし時、尺教(七〇四)

のような使用例が、計九例ある。

表(8)からは、勅撰集の歌題としての使用は、『統古今和歌集』からであることがわ

かる。特に、「新後撰詞書」において急増したのは、時代的な嗜好とともに、前稿でもふれたように、部立としての「釈教」部の歌数の多さとも関係していると思われる。なお、『新後撰和歌集』に続く『玉葉和歌集』以降のすべての勅撰集の「詞書」においても「しやくけう」の使用例はあり、特に、「玉葉詞書」「新千載詞書」において、各一例と頻用されている。なお、両「詞書」における「しやくけう」頻用についても、「釈教」部の歌数の多さ<sup>27)</sup>に、その理由を求めるところができる<sup>28)</sup>と考える。

四—1

上記三で、「新後撰詞書」の特徴的な基幹語のいくつかについて、その使用実態をみた。しかし、「新後撰詞書」の非基幹語のうちにも特徴的な使用語と思われるものが散見するので、以下、このような使用語についてみることにする。具体的には、「千載詞書」から「統拾遺詞書」においては使用例がなく、「新後撰詞書」においては使用例がある「みゆき(深雪)」「ねぶり(眠)」について、その使用実態をみる。

2

まず、「みゆき（深雪）」についてふれる。

勅撰集の和歌部分には、漢字表記の「深雪」はないが、「みゆき」「みゆき（み雪）」、また、「みゆき（御幸・行幸）」との掛詞としての使用例が、

例 53 ゆふされば衣手さむしみよしののよしのの山にみゆきふるらし（古今・三二七）

例 54 けぬがうへに又もふりしけはるがすみたちなばみゆきまれにこそみめ（古今・三三三）

例 55 咲き匂ふ花のあたりは春ながら絶えせぬ宿のみゆきとぞ見る（千載・五二）

例 56 山桜散りてみ雪にまがひなばいづれか花と春にとはなん（新古今・一〇七）

例 57 時しらぬ山とはいへどふじのねのみゆきも冬ぞふりまさりける（続後撰・五一八）

をはじめとして多数ある。また、漢字表記の「深雪」の使用例は、私家集などの和歌部分には、

例 58 みよし野はまきのしたばのかれしよりとやまも深雪ふらぬ日はなし（夫木和歌抄・一三八九一）

例 59 三芳のの山の深雪にまがへてもきゆるはをしく散る桜かな（壬二集・一二五七）

など、少数ながらある。

一方、ここで使用実態をみようとする「詞書」の「みゆき（深雪）」は、「新後撰詞書」に、

例 60 位におましましける時、深雪といふ事をよませ給うける（五一三）

という使用例が、また、「続千載詞書」に、

例 61 後九条内大臣家百首歌に、嶺樹深雪といふ事を（六六五）

という使用例が、各一例あるにすぎない。ところが、勅撰集以外の「詞書」には、「深雪」と漢字表記する使用例が、

例 62 羈中深雪といふことを（有房集・五二）

例 63 閑居深雪（無名和歌集・三四）

例 64 野亭深雪（秋篠月清集・一三三二）

例 65 民部卿経房歌合せられしに、深雪（隆信集・二九〇）

例 66 嶺樹深雪（壬二集・一六〇九）

例 67 深雪といふことを（万代和歌集・一四九四）

例 68 前大納言経房家の五首歌合に、深雪（閑月和歌集・三二八）

など散見する。これらの使用例からすると、「みゆき（深雪）」は、勅撰集の「詞書」に相応に使用される可能性があるにもかわらず、実際には、上掲した二例にすぎない。

以上、私家集などの「詞書」における漢字表記の「みゆき（深雪）」の使用例からすると、それは歌題として、必ずしも珍しいものではない。また、例67のように、反御子左派とされる真観（光俊）が撰集に大きくかわった『万代和歌集』にもその使用例があることからして、必ずしも二条派のみが好んだ歌題とは言えない。しかし、勅撰集の「詞書」においては、わずか二例しか使用例がない点や、使用されているのがいずれも為世撰の勅撰集の「詞書」である点は無視し得ず、やはり「みゆき（深雪）」は、二条派的性格を持った、為世好みの歌題であると言えそうである。

### 3

次に、「ねぶり（眠）」についてふれる。

「新後撰詞書」には、

例69 中院入道右大臣家にて、水鶏驚眠といへる心を  
(二二四)

という「ねぶり」の使用例がある。また、勅撰集の「詞書」における「ねぶり」に関連した使用例としては、「金葉詞書」における、

例70 清海聖人後世なを恐れ思て眠り入りたりける枕上  
に、僧の立ちてよみかけける歌(六三二)

のような「ねぶりいる」や、「統拾遺詞書」における、

例71 法華経序品、未嘗睡眠の心を(一三四二)  
のような「睡眠」、<sup>(28)</sup>「新統古今詞書」における、

例72 人人あそび侍りける所にて、隆源法師いたくねぶ  
りければかはらけさすとて(二〇六一)

のような「ねぶる」があるが、わずか三例にすぎない。<sup>(29)</sup>

「新後撰詞書」における使用例は、歌題としてのものであるが、勅撰集以外の「詞書」には、

『散木奇歌集』における、

例73 郭公驚眠(二四三)  
や、

例74 擣衣驚眠(四七二)

という使用例など、「新後撰詞書」の使用例に類似した「〇

〇驚眠」という形式のものも散見する。

以下、『新編国歌大観』によって、『新後撰和歌集』以前の

「〇〇驚眠」という歌題の歌が載る歌集をみると、「郭公驚眠」という使用例が、上掲した『散木奇歌集』(二四三)と

『和歌一字抄』(七六一)に、俊頼の「擣衣驚眠」という使用例(同一歌)が、同じく上掲した『散木奇歌集』(四七二)、

『和歌一字抄』(七六〇)、『中古六歌仙』(三五)に、「雁声驚眠」という使用例が『教長集』(三七九)、『風情集』(四七

九)に、「荻声驚眠」という使用例が『玄玉和歌集』(六七

九)、『拾玉和歌集』(八四三)に、それぞれある。また、『新後撰和歌集』以後の歌集をみると、俊頼の「時鳥驚眠」という使用例(上掲『散木奇歌集』の「郭公驚眠」と同一歌)が『夫木和歌抄』(一七二〇五)に、同じく俊頼の「擣衣驚眠」という使用例(上掲「擣衣驚眠」と同一歌)が『題林愚抄』(四四八〇)に、「水鶏驚眠」という使用例が『垂槐集』(四七二)に、それぞれあることがわかる。また、『寂蓮結題百首』(四二二)には、かな書きの「をぎのこゑねぶりをおどろかす」(『玄玉和歌集』と同一歌)が、『隆信集』には、同じくかな書きの「をぎのおとねぶりをおどろかす」(一六四)や「しぐれねぶりをおどろかす」(二五一)のような使用例がある。<sup>30)</sup>

「新後撰詞書」における「水鶏驚眠」には、上記したように「〇〇驚眠」という類似した表現がある。しかし、絶対数も少なく、その「詞書」を持つ歌の詠者も限定的<sup>31)</sup>であり、時代的にもその多くは平安期に活躍した人物である。このような点からすると、「水鶏驚眠」という歌題、また、その中で使用された「ねぶり」は、度数がわずか一ではあるものの、「新後撰詞書」における特徴的な使用語であると言えそうである。

## 五

以上、「新後撰詞書」の自立語語彙に関して、主として「千載詞書」から「統拾遺詞書」までにおけるそれとの比較を通して、その使用実態の一端をみてきた。ここで、その要点を再掲することにより、本稿のまとめとしたい。

1 「新後撰詞書」を中心にしてまとめた類似度 $D'$ に関する表(1)からは、

I 成立年代が隣接した「詞書」相互間の類似度 $D'$ の値は高い

II 「新古今詞書」と「新勅撰詞書」との類似度 $D'$ の値は、Iの原則から外れる

III 「新勅撰詞書」と「統後撰詞書」以降の「詞書」との間の類似度 $D'$ の値は、相対的に低い

IV 「統後撰詞書」以降の「詞書」相互間の類似度 $D'$ の値は、それ以前の類似度 $D'$ の値と比較すると高い。中でも「統拾遺詞書」と「新後撰詞書」とのそれは、注目に値する高さとなっている

のような点がみてとれる。

2 「わする(忘、下二段)」の頻用は、「忘恋」という歌題の頻用の結果によるものと思われる。なお、「忘恋」という歌題については、非二条派の撰集である『玉葉和

歌集』『風雅和歌集』の「詞書」における使用度数が前後の勅撰集の「詞書」に比較して少ないことから、二条派好みの歌題のようにも思えるが、軽々には論じられない。この点については今後の課題としたい。

3 「こうあん（弘安）」の頻用は、撰者為世の父為氏が撰進した前代の勅撰集である『続拾遺和歌集』の撰歌資料としての「弘安百首」を重視した結果であろう。

4 「わかな（若菜）」の頻用は、これが中世的な歌題であり、二条派に好まれたものであるとともに、「新後撰詞書」において結び題として頻用された結果であると思われる。

5 「しやくけう（釈教）」の頻用は、時代的な嗜好であるとともに、部立としての「釈教」部の歌数の多さに関係していると考えられる。

6 「新後撰詞書」に使用された「みゆき（深雪）」の使用度は、わずか一である。しかし、その使用実態からすると、「みゆき」は二条派的性格を持った、為世好みの語であると言えそうである。

7 「新後撰詞書」に使用された「ねぶり（眠）」の使用度は、わずか一である。しかし、その使用実態からすると、「ねぶり（眠）」は「新後撰詞書」における特徴的な使用語の一つであると言えそうである。

#### [注]

(1) 以下、各勅撰集の詞書・左注に関しては、「千載詞書」『新古今詞書』のような略称を用いる。

(2) 拙稿「新後撰和歌集」の「詞書」の語彙―特徴的な使用語を中心に―（『解釈』第五八巻一一・一二月号、平成二四年二月）。以下、同様。

(3) 犬養廉他編『和歌大辞典』（昭和六一年三月、明治書院）の「新後撰和歌集」の項（濱口博章氏執筆）。

(4) 拙著『詞書の語彙論』（平成二〇年一月、笠間書院）、拙稿「続古今和歌集」の「詞書」の語彙について」（『日本語日本文学論集』平成一九年七月、笠間書院）、拙稿「八代集の「詞書」の語彙について」（『文科の継承と展開』平成二三年三月、勉誠出版）、拙稿「続拾遺和歌集」の「詞書」の語彙について」（『言語変化の分析と理論』平成二三年三月、おうふう）、その他。

(5) 「用語類似度による歌謡曲仕訳『湯の町エレジー』」（上海帰りのリル）及びその周辺」（『計量国語学』一二巻四号、昭和五五年三月）、『数理言語学』（昭和五七年一月、培風館）、その他。

(6) (4) 拙著、第一部第九章、注5。第二部第二章、表(1)、第三章、表(5)、その他。

(7) 佐藤恒雄「新勅撰和歌集成立への道」（『新古今集とその時代』和歌文学論集8 平成三年五月、風間書房）参照。

(8) (3) 書の「続後撰和歌集」の項参照（樋口芳麻呂氏執



筆)。

(9) (3) に同じ。

(10) (4) 拙著、第一部第九章、第二部第一章、その他。

(11) 「新古今詞書」に関して、本稿の底本(小宮堅次郎氏蔵本)の二三九五番歌の「詞書」には「…「わすられてや」と…」とあるが、『新編国歌大観 第一巻』所収本の底本(谷山茂博士蔵寿本)や『新古今和歌集』(日本古典文学全集26 昭和四九年三月、小学館)の底本(山崎宗鑑書写本)では、それぞれ「…わすれてやと…」(二三九六)、  
「…「忘れてや」と…」(二三九五)とする。

(12) 「忘恋」に類似した「被忘恋」は、「新古今詞書」の

例A 被忘恋の心を(二三三三)

という使用例をはじめ、「続後撰詞書」(九五三、九八八)、「続古今詞書」(二三六七)にもある。

(13) 『玉葉和歌集』から『新続古今和歌集』までの勅撰集の「詞書」や、私家集などの「詞書」における使用度数は『新編国歌大観 CD-ROM版 Ver.2』(平成一五年六月、角川書店)によって調査した。以下、同様。

(14) 「新後撰詞書」には、

例B 弘安元年八月に、月与秋久といへる心を(二五八

三)

のような「弘安元年」の使用例もある。

(15) 「続千載詞書」には、

例C 弘安元年亀山院に百首歌たてまつりける時(二

三)

例D 弘安元年百首歌奉りける時(二〇一六)

のような「弘安元年」の使用例もある。

(16) 「続後拾遺詞書」には、

例E 弘安元年宇治橋供養日、亀山院御幸ありけるに、

雪いとふかく(二〇五〇)

のような「弘安元年」の使用例もある。

(17) 「新千載詞書」には、

例F 弘安元年亀山院に百首歌たてまつりける時、春の

うた(一六)

例G 弘安元年九月尽日春宮にて三首歌講ぜられける

時、秋山曙(五一九)

例H 弘安元年三月藤原景綱ともなひてにし山のよしみ

ねといふ寺に(二二八二)

のような「弘安元年」の使用例もある。

(18) 「新拾遺詞書」には、

例I 弘安元年亀山院に百首歌たてまつりける時(四

七)

のような「弘安元年」の使用例もある。

(19) 「新後拾遺詞書」には、

例J 弘安元年亀山院に百首歌たてまつりける時(二〇

二)

例K 弘安元年亀山院にて十首歌講ぜられけるに、初冬

時雨(四六二)

のような「弘安元年」の使用例もある。

(20) 「新統古今詞書」には、

例 L 弘安元年亀山院に百首歌たてまつりける時、春の

歌の中に(四)

例 M 弘安元年亀山院に百首歌たてまつりける時(二五

八)

のような「弘安元年」の使用例もある。

(21) 安田徳子氏は、「弘長百首」に関して、勅撰集撰進のため  
の応制百首とは性格を異にしており、『統古今和歌集』  
の応制百首とは考えられないとされている(「弘長百首」  
について)『名古屋大学文学部研究論集(文学)』八二号、  
昭和五七年三月)が、ここでは一応通説に従い、応制百首  
とみなした。

(22) 結び題としての「沢若菜」の先駆的なものとしては、

「詞花詞書」に、

例 N 女どものさはにわかなつむを見てよめる(四三

五)

のような使用例がある。

(23) 歌題に関して、例42のようなものは数に含めない。

(24) 「玉葉詞書」から「新統古今詞書」における歌題として  
の「わかな」の使用度数、カッコ内に詠者が御子左家・二  
条派に属すると思われる用例数を、それぞれ示すと、二  
(二)、五(一)、二(二)、二(二)、五(一)、二(二)、二(二)、  
二(二)、三(二)のようになる。

(25) 部立の下位部類名としての「釈教」(『後拾遺和歌集』

や部立名としての「釈教歌」(『千載和歌集』以降)のよう  
なものもあるが、ここでは採らない。

(26) 「玉葉詞書」から「新統古今詞書」までの「しやくけ  
う」の使用度数は、一一、四、二、五、一一、四、二、三  
である。

(27) 『玉葉和歌集』は一一〇首、『新千載和歌集』は一一八首  
と、『玉葉和歌集』以降の他の勅撰集に比して多いと言え  
る(ただし、『統千載和歌集』は一〇六首と近似している  
が、他は八〇首未滿)。

(28) 「統拾遺詞書」における「未嘗睡眠」は、法華経序品か  
らのものであるが、(13)書によれば、『法門百首』の、  
例 O 未嘗睡眠(六八)

や、『発心和歌集』の、

例 P 又見仏子、未嘗睡眠、経行林中、勤求仏道(二

五)

という使用例のほか、『統詞花和歌集』(四四五)、『今撰和  
歌集』(二〇九)の季広詠(同一歌)の「詞書」などにも  
あることがわかる。

(29) 和歌部分には、

例 Q 逢ふと見しその夜の夢の覚めであれな長き眠りは  
うかるべけれど(千載・八七四)

例 R 暁のゆふつけ鳥ぞあはれなるながきねぶりをおも  
ふ枕に(新古今・一八一〇)

など多数の使用例がある。

- (30) 私家集その他の「詞書」には、「○○驚眠」以外にも「眠(ねぶり)」「ねぶる」の使用例は多数ある。その一端を(13)書によって示すと、

例 S 老眠早覚常残夜(千里集・六四)

例 T 花山院にて三首あるじの女どもいふほどに、こ

どねりわらはねぶりとるところ(嘉言集・九九)

例 U 夕殿螢飛思悄然、秋灯挑尽未能眠(拾玉集・一九五八)

例 V 貞応三年句題百首、水鳥眠岸(夫木和歌抄・六九

五九)

例 W 暁眠易覚(雅世集・六六九)

など。

- (31) 取り上げた「○○驚眠」という「詞書」が付された歌の詠者は、俊頼、永実、教長、公重、寂蓮、隆信、慈円、飛鳥井雅親である。『新後撰和歌集』の撰歌範囲の中では比較的古い時代に属する人物が多いことがわかる。

〔本文〕

語彙調査や引用に使用した本文は、「続拾遺詞書」は前掲書、「古今詞書」は佐伯梅友校注『古今和歌集』(日本古典文学大系8 昭和三三年三月、岩波書店)、「後撰詞書」は大阪女子大学国文学研究室編『後撰和歌集総索引』(昭和四〇年一月、大阪女子大学)の本文編、「拾遺詞書」は片桐洋一『拾遺

和歌集の研究 伝本・校本篇』(昭和四五年一二月、大学堂書店)の主底本、「後拾遺詞書」は川村晃生校注『後拾遺和歌集』(平成三年三月、和泉書院)、「金葉詞書」は川村晃生・柏木田夫・工藤重矩校注『金葉和歌集 詞花和歌集』(新日本古典文学大系9 平成一年九月、岩波書店)、「詞花詞書」は松野陽一校注『詞花和歌集』(昭和六三年九月、和泉書院)、「千載詞書」は久保田淳・松野陽一校注『千載和歌集』(昭和四四年九月、笠間書院)、「新古今詞書」は久松潜一・山崎敏夫・後藤重郎校注『新古今和歌集』(日本古典文学大系28 昭和三三年二月、岩波書店)、「新勅撰詞書」は滝澤貞夫編『新勅撰集総索引』(昭和五七年一〇月、明治書院)の底本、「続後撰詞書」『続古今詞書』「続拾遺詞書」は『新編国歌大観 一』(昭和五八年二月、角川書店)所収本に、それぞれよる。また、私家集などは、注(13)にも示した『新編国歌大観 CD-ROM版 Ver.2』(平成一五年六月、角川書店)所収本に、それぞれよる。なお、本稿中で『新編国歌大観』とする場合は、同書。傍線筆者、引用の後の( )内の数字は、引用本文の歌番号を、例58における歌番号の前の「夫木和歌抄」などは出典を示す。ただし、例53のように出典が勅撰集の場合は「古今」のような省略した形で示す。また、『散木奇歌集』(二四三)なども出典と歌番号を示す。なお、引用に当たって、漢字の字体は現行のものに改めた。以下、同様。